

北京の四合院 -- 胸を突き刺す優雅な思い出たち (特集 世界の住まい・今)

著者	渡邊 真理子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	191
ページ	5-6
発行年	2011-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004169

北京の四合院

―胸を突き刺す優雅な思い出たち―

渡邊 真理子

今回、北京の四合院について、何か書けないか、というお題をいただいた。四合院は古きよき北京を代表するイメージである。北京オリンピックの前後に、北京の二環路と呼ばれる旧城壁の中の町に残る四合院をレストランやホテルに改装したスポットが次々現れ、ガイドブックをにぎわすようになった。四合院ホテルは今でも人気である。また、北京オリンピックといえ、この大会の金メダリストも四合院と絡めて当時話題になっていた。中国の飛び込み競技の第一人者の郭晶晶選手は、アスリートとしての実力に加え、クールビューティな美貌ゆえに中国では非常に人気が高い。その彼女が交際しているボーイフレンドは、香港隋一の財閥の当主ヘンリー・フォック（霍英東）の直系の孫ケネス・フォック（霍啓剛）だった。ヘンリー・フォックは香港中華総

商會会長を勤めた香港財界の重鎮で、その昔毛沢東率いる共産政権成立直後の鎖国時代に中国へ秘密裏に物資を供給し、中国に感謝されたと言われている。その後、スタンレー・ホーとともに、六〇年代初めに入札でマカオでの賭博利権を手に入れ、香港有数の親中派ビジネスマンだった。郭選手は、北京オリンピックで金メダルを獲得したあと、このボーイフレンドの父親から金メダルを受け取っている。この二人がいよいよ結婚し、郭選手のシンデレラストーリーが完璧なものになる、というとき、北京の四合院を結婚祝いとして贈られるらしい、と地元のエエローパーパーは盛んに報じていた。この四合院は、地下鉄の和平門の近く、長安街と故宮の南側に位置し、ヘンリー・フォックが一九八七年に一七〇万円で買ったが今の時価評価では一億元を超えるという。由

緒正しい四合院はいまはセレブのステイタスのシンボルとなっている様相であった。

とはいえ、私は四合院についてひとりの老北京に執筆を依頼しよう、と思いついた。彼女は雑誌の編集を長く勤めてきている。「いろんな国の住まいへの思いを集めた特集なので、気軽に書いてください。」商売柄、気軽にに応じてくれるだろう、と算段してみたのである。ところが、「そちらが気軽に何を書いて欲しいのがわからないが、私たちにとっては歴史の間に埋没されてしまった大切なものだ。四合院という言葉を聞くと、悲痛な思いと無力感と切なさで胸がいつぱいになってしまふ。」という返答が帰ってきた。

彼女は結婚して、北京の長安街から西安門大街に抜ける府右街の一角の互助巷という胡同の四合院

に住み始めた。この通りの東側は、中南海と呼ばれる地区と隔てる壁が続いている。中南海は、現在にいたるまで中国の政治の中核を担う地区であり、豊かな緑と道路が整然と整備され、警官が安全のために配備されている。彼女が嫁いだ家の四合院は、明朝末期の官僚の邸宅で、清朝期には引退した宰相の居所となっていた。中華民国時代には、北京最大の石炭商人の住宅となり、共産党が政権をとって解放されたあとは、糧食部の五人の部長、秘書、そして運転手にいたる二〇人あまりが、正院、東院、西院に分かれて住んでいた。その後、公安部がこの官邸をさらに二つに分け、彼女の婚家は、東院、北房の五つの部屋、西院、三部屋を使っていたが、文化大革命が始まると、西院に押し込められ、北房は造反派に占拠されてしまふ。彼女は、この西院に二〇年住み、一九九七に老いた自分の母親の介護をするために故宮の北の北海に移り、元の家には息子たちが住み続けた。「この互助巷の四合院は、本当に美しく豪壮だった。最近雨後の筍のように建てられている復古型の四合院とは比べものにならないほど、優雅だった。太湖石（山水画・花鳥画・雑画な

どの題材。江蘇省と浙江省の境にある太湖に浮かぶ島「洞庭西山」から採れる名石・奇石。美しく装飾が施された廂、長い外廊下、壁にはめ込まれた繊細な篆刻、彫刻の窓枠、どれをとっても二度と作り出せないものばかりだった。しかも、この『北京市文物保護單位』がなんと今取り壊されようとしている。一平方メートルあたり五万元、全部で三〇〇万元の補償費をもらって、私たちは真新しいマンションを買って住むことになってしまった。夫は『柵からばた餅』と興奮しているが、私はこの話を聞いたときからいろいろな思いが錯綜して、一度も気持ちが晴れない。」

「私たちは歴史を全て土の下に埋めてしまつていいのだろうか。」「なぜ政府はこんな大金を払つてまで、庶民を政府から遠ざけようとしているのか。」「このプロジェクトの背後で誰が儲けようとしているのだろうか。」「どうして、住民を追い出さずに建物を修復し、蘇州庭園のように人々の観賞してもらうように利用できないのか?」「北京の文化は過去の写真かドキュメンタリーにしか見つけることができなくなつてしまうのだろうか。」

彼女の思い出は、強大な資本とブルドーザーに押しつぶされようとしている。子どものころ、正月の挨拶回りで巡つたのは、北京の西側西城地区、今の金融街と呼ばれる区域のあたり、どれも中華民国以前の官僚高官の邸宅が集中していた地域である。ひとつひとつの四合院は、何区画にも広がり、応接室には、紫檀や楠に祥雲、コウモリ、仙鶴の彫刻がはめ込まれた壁があり、どの四合院にも長い廊下があつた。その壁には彫刻や篆刻が優美に飾られ、大きな門の前には様々に趣向を凝らした装飾の施された石堆が置かれていた。子どもたちは院の南か東西の廂房に住み、両親の部屋は第二区画の北屋にあつた。表玄関に近い、第一区画の北屋は応接室、書齋、もしくは「戦略室」で世界地図と中国の地図が掛けられていたものだった。こうしたものは、いま全てなくなつてしまった。

西城地区が伝統的に官僚・政治家の邸宅が並んでいた地区であつたのに対し、北京の東側、東城地区は豊かな商人の居住区となつていた。「私はあまり行つたことがなかつたが、西城地区の四合院の壮麗さ優雅さには及ばなかつたと思う。」彼女自身の実家は、故宮

の東側、王府井の 胡同の家で、もとは清朝徳玲王女の居住地で、共産党政権成立以降は、共産党の創始者のひとり董必武の北京駐在地となつた。その後、聾啞人協会、中国赤十字社の家族宿舍に転用されたものだった。一九五〇年代から六〇年代をここで過ごしたが、ここにも太湖石、水と樹と東間を設けた庭、美しい彫刻を施した窓、娘たちの部屋に使われた屋根裏部屋、長い廊下、そして西洋式の装飾を施された広縁があつた。こうしたものは、一九七八年に全て壊され、整地され、五階建ての簡素な建物が建てられてしまった。当時の北京の住宅問題を解決するためであつた。

時を経て、二〇〇〇年代に入ると住宅の売買が可能になり、一部中国をよく知る欧米人の間では、古い四合院を買い取つて美しく改装し、設備なども現代的なものに取り替えて住む動きがはやつていた。「私のフランス人の友人も、故宮の北、景山公園のさらに北側、山西省駐北京オフィスの向かいの四合院を買つて美しくモダンな建物に改装した。」しかし、二〇一〇年に取り壊されてしまった。景山公園の壁を見えやすくなるため、というのが、理由だった。

当時の写真を眺めると、ここ四合院の面影が写っている。それを見る度に、これまで経験のしたことのないほどに胸が痛む。「こんなことを長々と話してきたのは、今の中国経済を構成する要素にこんなものもあることをぜひ知ってもらいたかつたからです」「でも書けない。ペンをとつて書いてみようと思ひたけれど、やはり書けません。美しく、印象深い文章が書けたらいいのだけれど、やはり無理でした」という返事が結局きた。しかし、私には彼女の痛みをきちんと書ききれる由もない。結局、彼女の語つてくれたとおりに、ここに記してみた。

(わたなべ まりこ/アジア経済研究所 東アジア研究グループ)